

出雲方言におけるシ・ス, チ・ツ, ジ・ズの混同一発話のスタイルとの関係

Mergers of /si/ and /su/, /ti/ and /tu/, and /zi/ and /zu/ in Izumo dialect of Japan: Their stylistic differentiation

於近畿音声言語研究会第9回研究発表会(1986/9/20)

前川喜久雄(鳥取大学)
MAEKAWA, Kikuo (Tottori Univ.)

要旨 出雲方言のサ行, タ行, ザ行における混同現象と発話のスタイルとの間には明らかな相関関係があることを音響分析の結果に基づいて報告する。従来の報告にある混同現象を完全な形で認めることができるのは, スタイルが最も低い発話の場合のみである。

ABSTRACT Mergers of some selected syllable pairs in Izumo dialect have long been well reported. In this paper, the present state of the merger is analysed by means of sound spectrography. Statistical test on the formant frequencies bears testimony to the presence of the stylistic differentiation. The complete mergers reported in earlier works can be recognized only in the lowest style as far as present-day Izumo dialect is concerned.

1. 問題

出雲方言は東北方言などと同じく, サ行, タ行, ザ行のイ段, ウ段(およびウ段のヨウ音)の間に音韻的な対立が存在しない方言であると言われている。東京方言などを基盤とする全国共通語と出雲方言との間には, 従来, およそ次のような音節レベルでの対応が存在するとされてきた(柴田, 1962 など)。

共通語		出雲方言
/s i/ ~ [ʃ i]	⇔	/s i/ ~ [s i]
/s u/ ~ [s u]		
/s j u/ ~ [ʃ u]		
/t i/ ~ [tʃ i]	⇔	/t i/ ~ [ts i]
/t u/ ~ [ts u]		
/t j u/ ~ [tʃ u]		
/z i/ ~ [ʒ i]	⇔	/z i/ ~ [ʒ i]
/z u/ ~ [ʒ u]		
/z j u/ ~ [ʒ u]		

しかしながら, 発表者が1984年以来のフィールドワークで得た経験によれば, 今日の出雲方言の音韻体系をこのような一元的な対応関係に還元してしまふことは, 非常に困難である。対象を生え抜きの老人層に限った場合でも, 問題となる音節の母音の発音には大きな変動性(variability)が認められ, 概略的に言えば, [i] から [ɨ] を経て [u] までの音質が連続的に観察されるからである。

以下ではこのような母音音質の変動が, 発話のスタイルによって深く条件付けられていることを実証する。(発話の)スタイルとは「発話に際して話者が自分の発話にどれほどの注意をむけているか」によって規定される発話の類型である。

2. 調査

調査地域は島根県簸川郡斐川町（人口約24000人、面積約73km²）。宍道湖の西にひろがる出雲平野中の農業地帯であり、方言区画上、雲伯方言地域に属する。ここで問題とする混同現象に関して、雲伯方言地域はその外周地域と中心地域とに二分され、完全混同は出雲平野を取り巻く中心地域でのみ生じているとされるが、斐川町は無論、そこに属している。

インフォーマントは、次の3名の男性にお願いした。全員、斐川町生え抜きで外住歴も少ない方である。

Iさん	75歳	斐川町大字直江字中筋	農業
Kさん	70歳	斐川町大字久木字今在家	元公団職員
Tさん	67歳	斐川町大字出東字天神	農業

この他、比較のために京都生まれ、東京育ちの共通語話者（成人男性）1名の資料も利用する。

調査にあたって、下記の3種のスタイルを設定した。

スタイル1 (SYL)	仮名文字リストの読みあげ
スタイル2 (STC)	標準語文法による短文リストの朗読
スタイル3 (DIS)	斐川町の話者どうしによる自然談話

ここで、SYL → STC → DISの順にスタイルが低下する、すなわち発話に払う注意が少なくなること予想している。この他、IさんとTさんについて、調査票を用いた面接調査を行なっているので、それも4番目のスタイルとして採用する

スタイル4 (INT)	調査票によるインタビュー
-------------	--------------

なお、ここで以下で用いる用語を規定しておくことにする。「斐川町方言のシ、ス、シュ」等の表現は「斐川町のインフォーマントの発話で、共通語のシ、ス、シュに対応する音節」を意味する。その音節の音声学的な実質がどうであるかは一切無関係である。例えばSTCないしDISで、「墨」の発音が[sim i]であろうと[su mi]であろうと第一音節は共に斐川町方言のスである。

3. 分析

3.1 子音の音質

子音の特徴を聴覚的に検討する。第一に、直音とヨウ音の区別はスタイルと相関しており、SYLでは硬口蓋化の程度によって直音とヨウ音が明確に区別される。STCではヨウ音が区別されたり、されなかつたりするが、DISでは全く区別がなくなる。以下にはIさんの資料から、ヨウ音が区別されて発音されたケースの比率を示した（括弧内は観察されたケースの総数）。他の話者もほぼ同様であった。

	STC	DIS
/s j u/	71% (7)	0% (6)
/t j u/	100% (5)	0% (6)
/z j u/	75% (8)	0% (22)

次に、直音のイ段とウ段では、各行ともスタイルによらず、子音の音質に組織的な変化は認められない。従って直音のイ段とウ段の区別は（もし存在するならば）もっぱら母音によっている。以下では問題を直音に限り、音響的な手法による分析を行なった結果を述べる。

3.2 音響分析

各スタイルの発話中に含まれる斐川町方言のシ、ス、チ、ス、ジ、ズの母音をサウンド・スペクトログラム (Kay; Model 7800) にて分析した。分析レンジは0~4000Hz. Pattern 上で母音の定常部分（それが不在ならばF2ないしF3のビー

ク時点。さらにそれも不在ならば母音区間の中央部)を選んで section をとり、共鳴曲線をあてはめる方法によって第1, 第2, 第3のフォルマント周波数(F1, F2, F3)を測定している。

なお, STC, DIS, INTについては発話中の/CVC/もしくは/CVR/(Rは引き音素)の連鎖だけを分析の対象とした。/CV₁V₂/(V₁キV₂)の場合, V₁からV₂へフォルマントの連続した推移が生じ, 両母音の境界が判然としないことが多いからである(ことにDISにて顕著であった)。

4. 考察

4.1 まずF1-F2平面上での資料の散布状態とスタイルの相関を視覚的に確認しよう。最初に共通語の資料を眺めると, SYL → STC → DISとスタイルが低下するにしたがってイ段とウ段が多少接近する傾向は認められるものの, DISに到っても両者は明瞭に各個の分布範囲を分離させていることが見てとれる。すなわちここではスタイルと母音の音質の間に言語学的にみて重要な相関が見いだせない。

次に斐川町の資料に眼を転じると, 3名のインフォーマントがそろってスタイルとの相関を見せている。最高齢のIさんを例にとると, SYLではイ段とウ段とが辛うじて分離しているようだが, STC, DISでは両者は明らかにオーバーラップを示しており, いわゆる混同が存することをうかがわせる。またTさんの場合, SYLからSTCまではイ段とウ段が分離しており, DISに至ってはじめて両者が判別し難い状態に転じていると見てよいだろう。

4.2 上述の視覚による判断に客観性を与えるために, 統計的検定を施してみる。帰無仮説はF1-F2-F3の3次元空間中でイ段母音とウ段母音との間に平均値の差がないというものである。検定の結果は表I~IVのとおりであった。表中○印は1%水準で有意差が認められたケース, △印は5%水準でのみ有意差が認められたケース, ×印は5%水準でも有意差なしと判定されたケースである。

表I 共通語

	SYL	STC	DIS
SI, SU	○	○	○
TI, TU	○	○	○
ZI, ZU	○	○	○

表II 斐川町 Iさん

	SYL	STC	DIS
SI, SU	△	×	×
TI, TU	○	×	×
ZI, ZU	×	×	×

表III 斐川町 Kさん

	SYL	STC	DIS
SI, SU	○	○	△
TI, TU	○	○	○
ZI, ZU	○	○	×

表IV 斐川町 Tさん

	SYL	STC	DIS
SI, SU	○	○	×
TI, TU	○	○	×
ZI, ZU	○	○	×

この結果と先におこなった視覚による混同状況の確認とをつきあわせてみると, 次のような解釈が許されそうである。○印のケースはともかくイ段とウ段が発音の上で区別されている。×印のケースは全く区別されていない。そして△印は両者の中間であり, 区別があるともないとも決定できない。

4.3 表I~IVからは, どのインフォーマントもスタイルの高い発話から低い発話にむかって○の数を減じていく様子が明らかである。Iさんの場合はSYLとSTCの間に大きな変化があり, TさんとKさんではSTCとDISの間に大きな変化がある。3名をとおして見ると, 調査で設定した3種のスタイルは措定し

たとりの順序尺度を構成していることがわかる。

インフォーマントの個人差について簡単に検討すると、最も高齢のIさんはスタイルが高い発話においてもXが多い。マイクに向かって仮名文字リストを読むという最も発話に注意が集中される状況においてもジとズが区別されていない。一方、TさんとKさんは文字を読む行為という点で共通性の認められるSYLとSTCでは、すべてOである。ところが、DISになって文字という音韻対立の指標がなくなると、とたんにOが減じる。二人のうちで年齢の高いKさんの方がDISにおいてもチとツを区別しえているのは不思議ともいえるが、これは長らく公団職員として公の場で働いておられた経歴の影響として説明できるだろう。

4.4 以上の検討からは文字の有無が混同状況の変化に強い影響を与えていることが明らかになった。それでは混同の変化を説明する要因として本当に重要なのは文字の有無なのであって、スタイルというような潜在的な連続変数を導入する必要はないのだろうか。答は否である。この点を明らかにするためにINT資料を検討しよう。

表 V 斐川町 INT

	Tさん	Iさん
SI, SU	X	△
TI, TU	X	X
ZI, ZU	未調査	△

不完全な資料ではあるが、表II, IVと比較すれば、TさんについてはSTCとDISの間に、IさんについてはSYLとSTCの間にINTを位置づけることができそうである(ただし、Iさんの場合、SYLではXになっているジ、ズの区別がINTでは△になっているという不合理はある)。この資料だけから一応の結論を出せば、方言調査者との面談という場面においては、文字が介在しない発話にもかかわらず、少なくともSYLに比べてスタイルの上昇が認められる。混同状況の変化は文字の介在以外の要因——この場合は面識のない外来の調査者から調査されることによる緊張の高まり——によっても引き起こされるのであり、やはりスタイルという連続変数を考える必要がある。

なお、余談ながら上記の結論を逆に言えば、通常の言語地理学の調査では、DISに比べて高いスタイルの発話を記録している可能性が強い。これはIさんのようなインフォーマントを相手にする場合、自然談話では存在しない音韻対立を帰納してしまう危険性があるということであり、皮肉なことには精密な音声表記を行なう程に、この危険性は高まる。

参考文献

Chambers, J.K. and P. Trudgill (1980) *Dialectology*. Cambridge Univ. Press.
 Labov, W. (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Univ. of Pennsylvania Press.
 井上史雄 (1980) 「方言音声の使い分け能力」, 『音声言語の研究』(1).
 柴田武 (1962) 「音韻」, 国語学会編『方言学概説』武蔵野書院.
 室山敏昭 (1970) 「山陰方言の音声学的研究(1)」, 鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学 第21巻第1号.

謝辞

自然談話資料の一部を鳴門教育大学の今石元久氏より提供していただきました。記して感謝いたします。

SYL

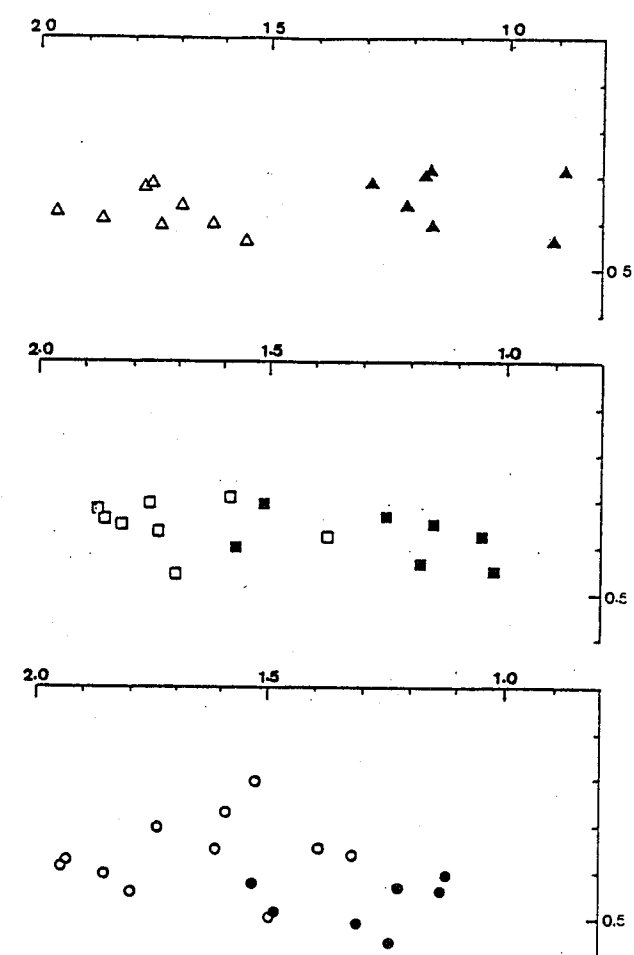
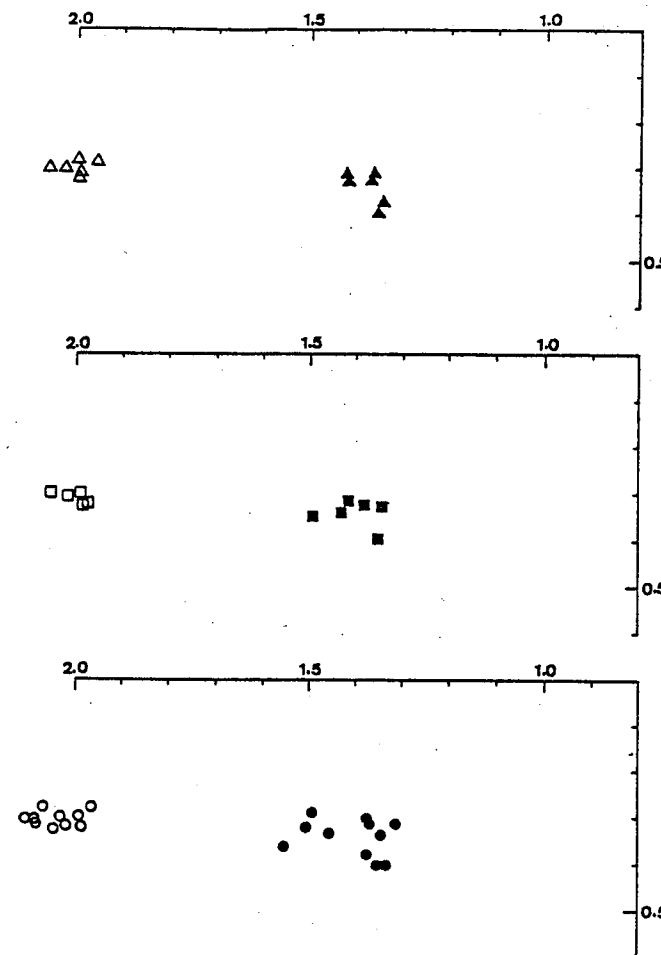
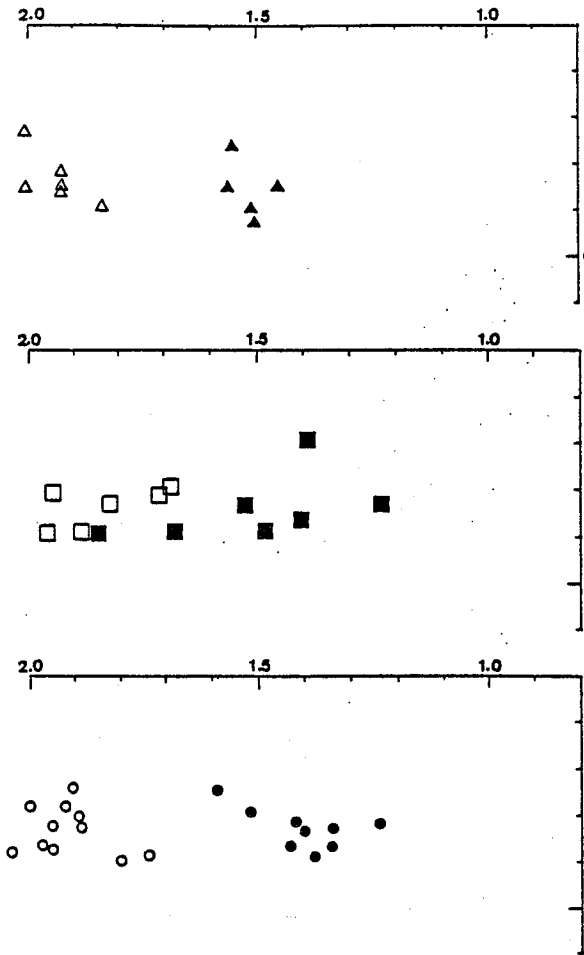
STC

DIS

△ : / s i /
▲ : / s u /

□ : / t i /
■ : / t u /

○ : / z i /
● : / z u /



共通語の母音の変化

縦軸 F 1 , 横軸 F 2 (単位 K H z)

SYL

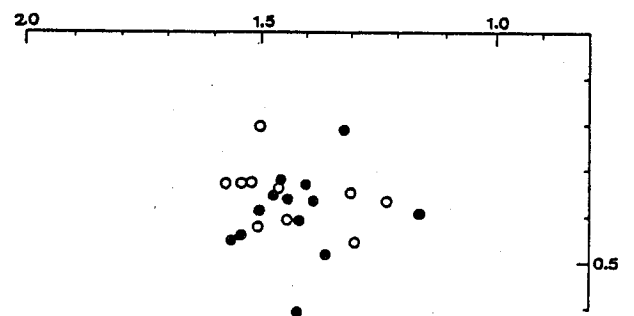
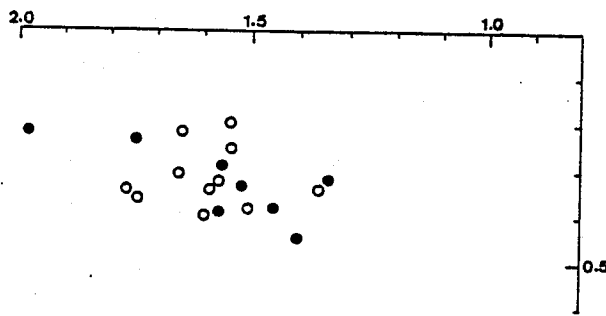
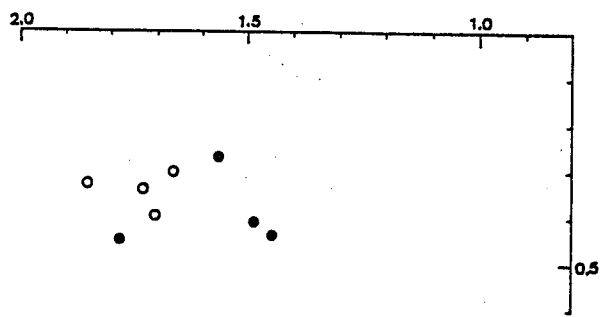
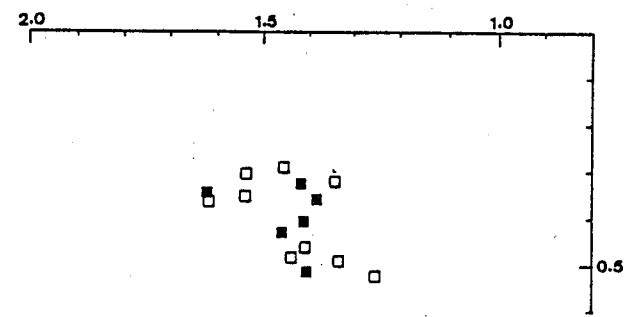
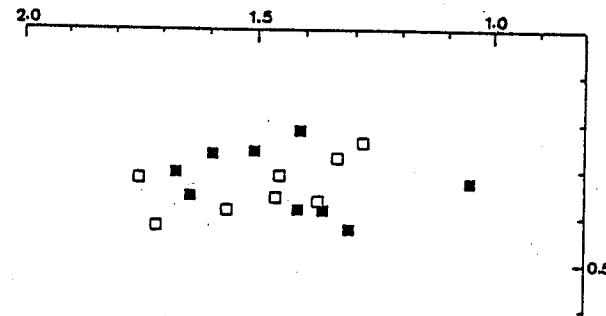
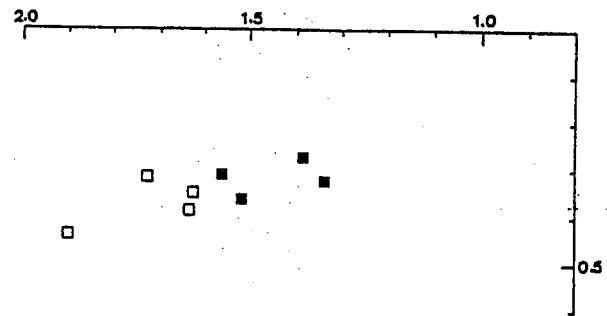
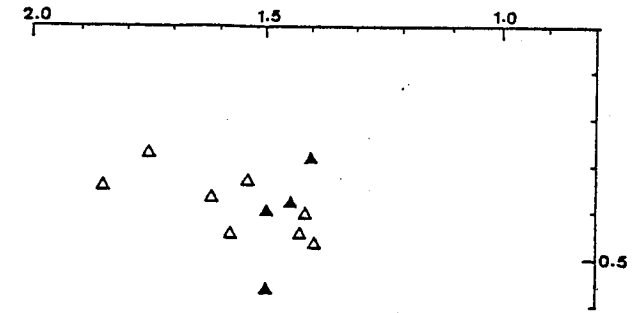
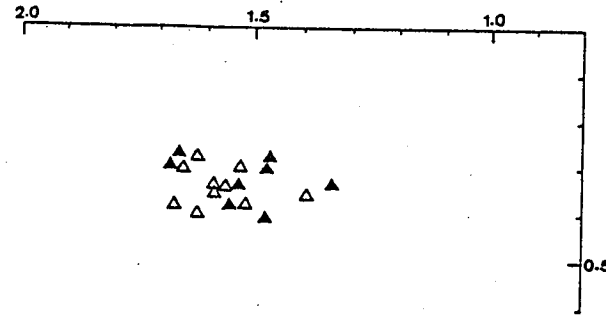
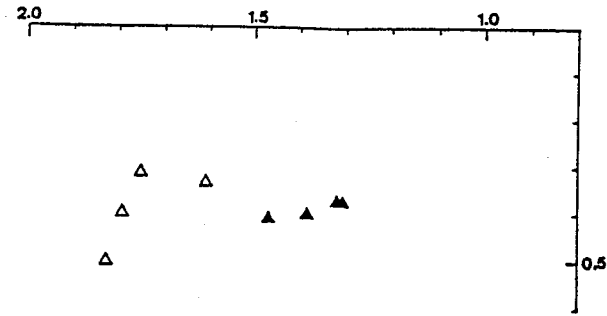
STC

DIS

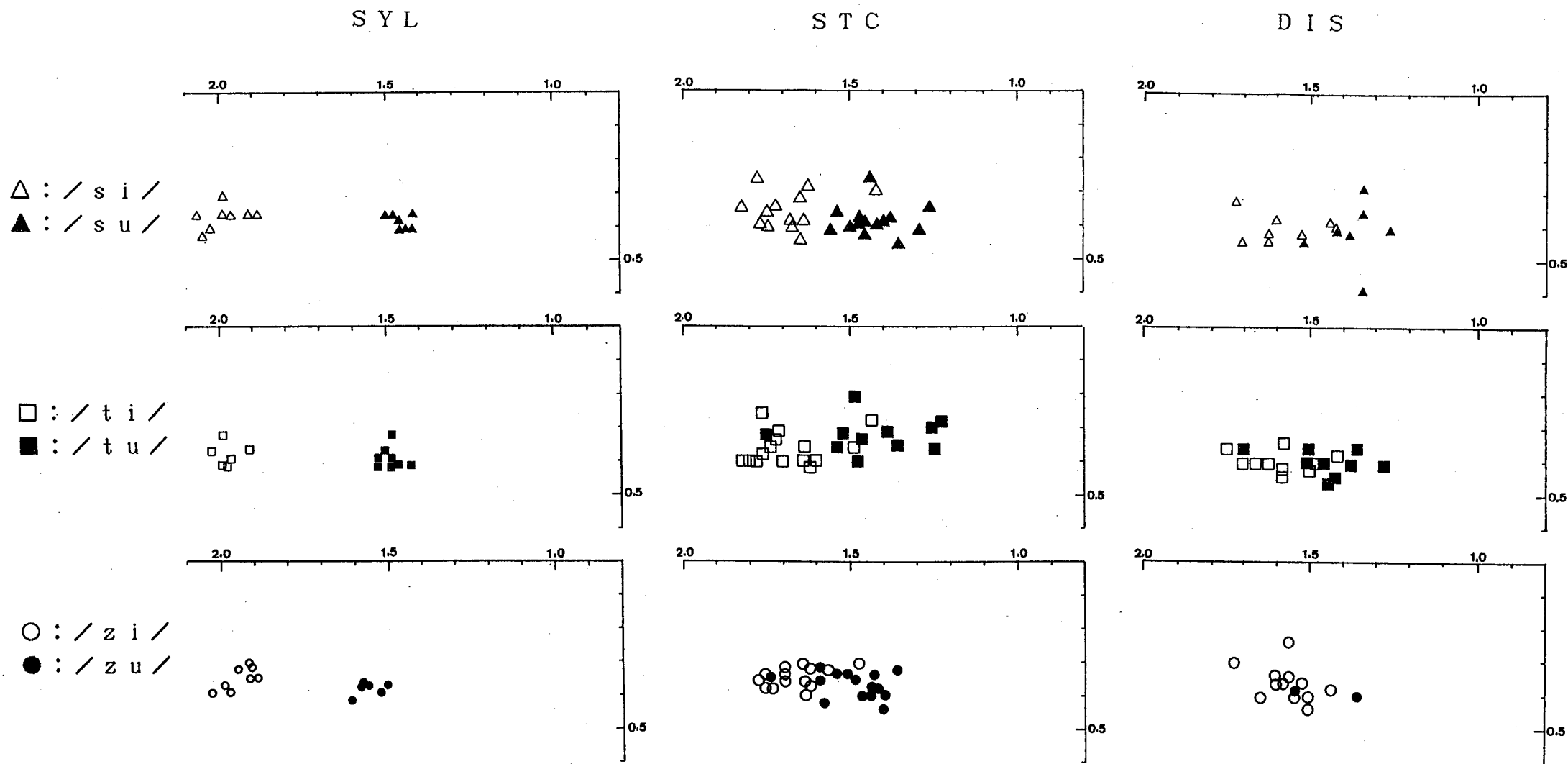
△ : / s i /
▲ : / s u /

□ : / t i /
■ : / t u /

○ : / z i /
● : / z u /

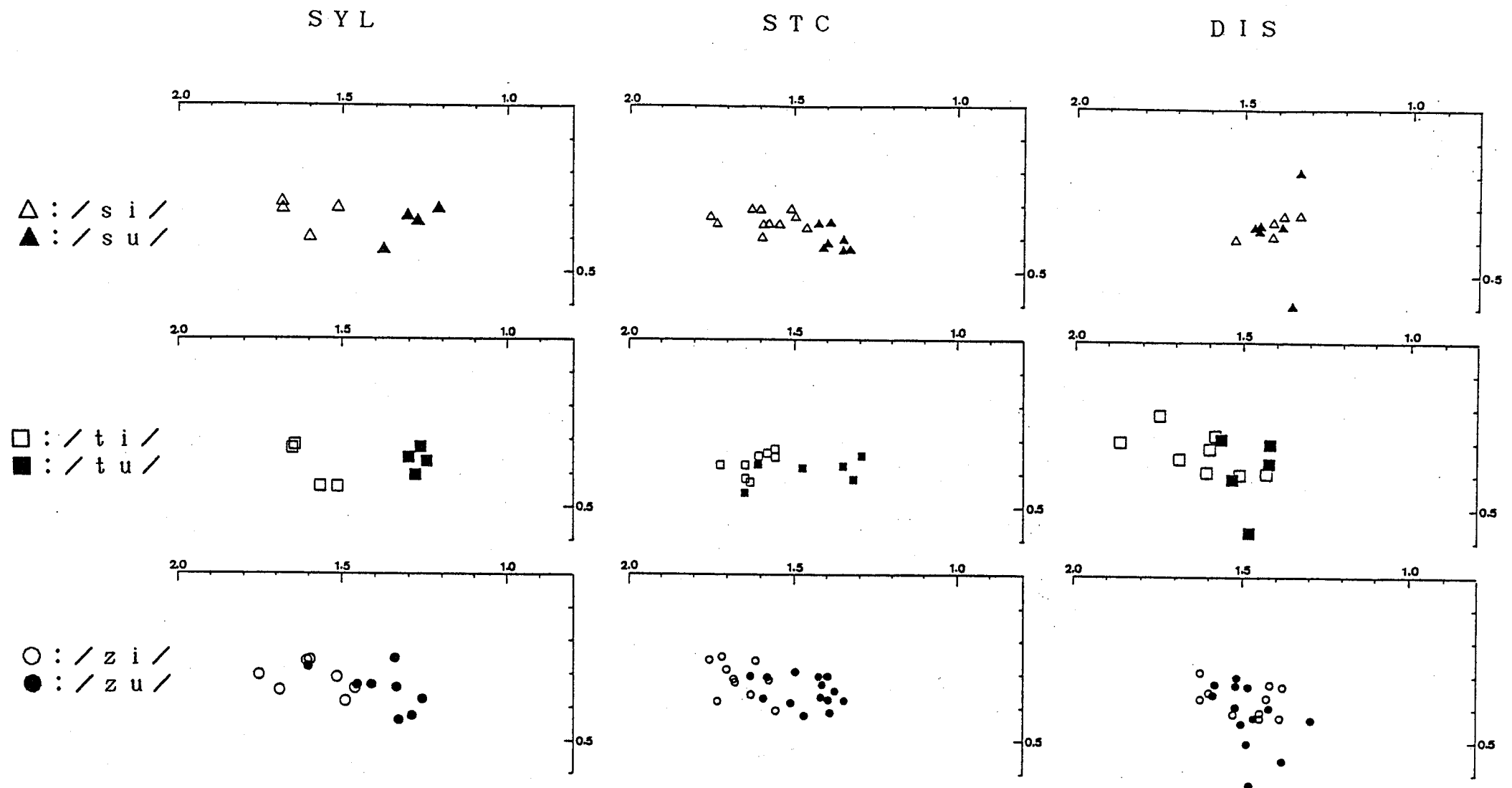


斐川町 Iさんの母音の変化
縦軸 F 1 , 横軸 F 2 (単位 K H Z)



斐川町 Kさんの母音の変化

縦軸 F 1 , 横軸 F 2 (単位 K H z)



斐川町 Tさんの母音の変化
 縦軸 F 1 , 横軸 F 2 (単位 K H z)